

新型コロナウイルス感染症流行下における大学生のコミュニケーションの変化；自由記述調査と変化に対する感情からの理解の試み

藤原 健志^{1*}

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下において、多くの場面において対面コミュニケーションは制限されている。本研究の目的は、このコミュニケーションの変化を若者がどの程度経験しているのか、経験している場合には、これをどのように感じているのかを探索的に明らかにすることであった。大学生 300 人を対象とした Web 調査を行い、コミュニケーションの在り方の変化の有無、変化した場合にはその内容について自由回答を求めるとともに、変化にまつわる諸感情の該当の有無を尋ねた。その結果、回答者の約半数が、COVID-19 流行前後においてコミュニケーションの在り方に変化があったと回答した。変化の具体的内容については、記述された内容について、形態素分析を行った上で共起ネットワーク分析にて、各語の関連を検討した。その結果、直接会う機会の減少とオンラインでの交流の増加、久しぶりの対面機会での緊張感や戸惑い、マスク着用による感情読解の難しさを感じていることが明らかとなった。コミュニケーションの変化についての受け止めでは、回答者自身に該当していると回答した形容詞はネガティブな内容がやや多かったほか、特にコミュニケーションが「大きく変わった」と回答した者において、ネガティブな形容詞への該当者の割合が大きかった。これら結果に対して、各種統計資料や社会心理学領域の先行研究との関連から考察が行われた。

キーワード： 新型コロナウイルス感染症、コミュニケーション、共起ネットワーク分析、大学生、感情

問題と目的

日本国内において新型コロナウイルス（以下、COVID-19 と表記する）に関連した肺炎患者が最初に確認されたのは令和 2 年(2020 年)1 月 16 日であった¹⁾。同 3 月 24 日には、大学の授業開始に際し、遠隔授業の活用について通知が行われた²⁾。これを受けて、4 月 23 日時点では高等専門学校を含む国公立大学の 88.7%に当たる 713 校が授業の開始時期を延期するとともに、調査に回答した大学等の 98.7%において、遠隔授業を実施または検討中であると回答した³⁾。その後、同 6 月 1 日時点では、遠隔授業を実施している大学等は 60.1%、面接授業と遠隔授業を併用している大学等は 30.2%と、回答のあった大学等のうち 9 割程度が遠隔授業を採用する

こととなった。感染拡大から 1 年半程度経過した令和 3(2021)年度後期では、ほとんど(97.6%)の大学等が半分以上を対面授業と予定するなど、多くの大学等において対面授業が再開されている⁴⁾。しかしながら、「全面対面」で授業すると回答した大学は 36.2%に留まっており、一時期よりは減少しているものの、非対面形式による授業は現在も継続しているとみられ⁴⁾、大学生において、他者との対面による交流が著しく減少したことが考えられる。

こうした中、他者とのコミュニケーションの機会やその内容の変化が、各種調査によって明らかとなっている。女子大学生を対象として 2020 年 8 月～9 月に行われた調査では、COVID-19 流行下において、友人とのコミュニケーションが「減った」と答えた学生は 77.0%にのぼった⁵⁾。また、

¹ 新潟県立大学人間生活学部子ども学科

* 責任著者 連絡先：tfujiwar@unii.ac.jp

利益相反：なし

日本赤十字社が2021年12月に実施した調査では、COVID-19流行が大学生の成長や経験へ与える不安として、「新しい人間関係を構築することが難しいのではないか」(33.0%)、「恋愛ができないのではないか」(29.0%)、「対人コミュニケーションスキルが身につかないのではないか」(27.0%)、「周囲の人との付き合いがうまくできないのではないか」(26.0%)といった、対人関係の構築や他者とのコミュニケーションに対して不安を感じている者の存在を指摘している⁶⁾。

また、文化庁が令和3年3月に調査を行った「国語に関する世論調査」⁷⁾では、「マスクをつけると話し方や態度が変わることがあると思うか」という問いに対し、62.4%の回答者が「変わることがある」と回答し、変化について、「声の大きさに気を付けるようになる」(74.1%)や「はっきりとした発音で話すようになる」(57.5%)など、対面コミュニケーションにおける変化が示された。また、ビデオ通話やウェブ会議といったオンラインツール上における留意点として、「自分が話すタイミングに気を付けるようにしている」(58.4%)や「はっきりとした発音で話すようにしている」(53.6%)などを多く挙げている⁷⁾。同様に、第一生命経済研究所の調査⁸⁾では、オンラインでのコミュニケーションの問題点について、回答者の約半数が話すタイミングの難しさや相手の反応のわかりにくさを挙げていた。このように、対面におけるマスク着用やオンライン上の非対面コミュニケーションの増加に伴って、従来のコミュニケーションから変化が起こったり、新たに配慮すべき事柄が生じたりしていることがうかがえる。

このように、現代青年がこうした社会情勢の変化に対する不安を抱いたり、新たな配慮事項を見出している一方、前向きな変化として受け止めている青年の姿も明らかになっている。例えば、先の女子大学生を対象とした調査では、COVID-19流行でよかったこととして、約6割の学生が生活面での変化(例えば自由時間の増加、生活習慣の見直し、通学時間の短縮等)を挙げている⁵⁾。また、大学生生活協同組合連合会⁹⁾が2021年7月に実施した調査では、オンライン講義のメリットとして、通学の負担がなく自由時間が増えること(62.1%)、自分の好きな時間

に(52.0%)、いつでもどこからでも(50.0%)、周りの目を気にせず(48.8%)講義へ参加できることを挙げている⁹⁾。このように、COVID-19流行における変化はさまざまな感情状態をもたらし、コミュニケーションの変化に対する認識もまた、個人差が大きいものと考えられる。

以上より本研究の目的は、こうした社会情勢の変化に伴い必然的に生じるコミュニケーションの変化をどの程度の学生が経験しているのか、またその変化をどのように受け止めているのかについて、量的・質的側面から明らかにすることである。具体的には、コミュニケーションの変化を感じているかどうかについて尋ねるとともに、その変化をどのように受け止めているかを感情的側面から明らかにするとともに、変化の大きさと感情状態の関連を検討する。さらに、生じた変化について自由記述による回答を求め、得られた語句の関連からその内容を整理することにより、定性・定量データの両側面からの検討を試みる。

方 法

調査時期

2021年10月であった。

調査対象者

全国の大学生300人(男性148人、女性152人、1年生から4年生75人ずつ)を対象とした。平均年齢は20.52歳であった。

調査方法

クロス・マーケティング社を通じて、以下の内容から構成されるWeb調査を実施した。

調査内容

以下の(1)から(3)の内容を、その順序で尋ねた。
 (1)コミュニケーションの変化：COVID-19流行前後において、コミュニケーションの在り方の変化の有無について、①「大きく変わった」、②「少し変わった」、③「あまり変わらない」、④「全く変わらない」の4件法で尋ねた。
 (2)変化に関する自由記述：(1)で①と②を選択した148人(男性64人、女性84人、1年生33人、2年生42人、3年生37人、4年生36人)に対し、その変化について自由記述を求めた。
 (3)多面的感情状態尺度：300人に対して、その変化をどのように感じているか、多面的感情状

態尺度¹⁰⁾の40項目を用い、該当の有無について回答を求めた((1)で④を選んだ者には、普段のコミュニケーションについて抱く気持ちを回答させた)。

分析方法

コミュニケーションの変化については、その割合を算出するとともに、変化があった者を対象とした多面的感情状態尺度を用いて、その変化の受け止め方について、その頻度と変化の割合とのクロス集計表を作成し、割合の偏りについて χ^2 検定を行い、有意な場合には自由度調整済み残差を算出した。これらの分析にはHAD ver.17¹¹⁾を用いた。自由記述の内容については、形態素分析を行ったうえで、各語の関連性について、共起ネットワーク分析を行った。これらの分析にはKH Coder¹²⁾を用いた。

倫理的配慮

調査にあたって、Webページの冒頭には、回答されたデータは統計的に処理され、個人が特定される方法で結果が公表されることがないこと、回答の中止や回答拒否に対する権利と、それによる不利益を受けないことについて記載された。これら内容に対して同意する場合に、回答を継続するように求めた。なお本研究は、上記の内容について、新潟県立大学倫理委員会による審査・承認を得て行われた(第2105号)。

結果

コミュニケーションの変化とその受け止め

300名に対して、コミュニケーションの変化について尋ねたところ、それぞれの人数と割合は、「大きく変わった」(42名; 14.0%)、「少し変わった」(106名; 35.3%)、「あまり変わらない」(114名; 38.0%)、「全く変わらない」(38名; 12.7%)であった。

上記で「全く変わらない」以外を選んだ回答者について、その変化についてどのように感じているか、感情語40種について、その該当の有無を多重回答法で尋ねた(Table 1)。その結果、頻度の高い順に、「慎重な」(46名; 17.6%)、「疲れた」と「のんびりした」(43名; 16.4%)、「不安な」(41名; 15.6%)、「自信がない」と「退屈な」(35名; 13.4%)、「ゆっくりした」(33名; 12.6%)、「だるい」(31名; 11.8%)であった。

また、コミュニケーションの在り方の変化と各感情の該当の有無についてクロス集計表を作成し、各セルの偏りの有無について、 χ^2 検定を行った(有意な場合には自由度調整済み残差を算出した)。その結果、「疲れた」($\chi^2(2)=10.45, p<0.01$)と「動揺した」($\chi^2(2)=12.63, p<0.01$)については、「大きく変わった」群において「疲れた／動揺した」に該当する回答者が期待度数よりも有意に多く、「あまり変わらない」群において「疲れた／動揺した」に該当する回答者が期待度数よりも有意に少なかった。反対に、「ていねいな」($\chi^2(2)=6.19, p<0.05$)については、「大きく変わった」群において非該当の回答者が期待度数よりも有意に多く、「あまり変わらない」に該当する回答者が期待度数よりも有意に多かった。「悩んでいる」($\chi^2(2)=8.39, p<0.05$)、「退屈な」($\chi^2(2)=7.15, p<0.05$)、「注意深い」($\chi^2(2)=6.18, p<0.05$)については、「大きく変わった」群において「悩んでいる／退屈した／注意深い」に該当する回答者が期待度数よりも有意に多かった(χ^2 検定の結果が有意であったもののみ Table 2に示した)。

変化に対する自由記述

調査協力者のうち、コミュニケーションの変化について、「全く変わらない」と回答した者を除く262名の自由記述について、その内容をKH

Table 1

感情状態の選択頻度			
感情語	頻度	感情語	頻度
慎重な	46	悩んでいる	21
疲れた	43	好きな	19
のんびりした	43	のんきな	18
不安な	41	丁重な	18
自信がない	35	おっとりした	17
退屈な	35	思慮深い	17
ゆっくりした	33	元気いっぱい	16
だるい	31	気がかりな	13
注意深い	28	恋しい	13
陽気な	27	活気のある	12
のどかな	25	動揺した	12
つまらない	24	すてきな	12
ていねいな	22	気力に満ちた	10
無気力な	21	はつらつとした	10

注) $n=262$

多重回答法

頻度10以上の語のみ掲出

Table 2
コミュニケーションの変化と感情状態の関連

Table 2-1
「退屈な」

	該当	非該当
「大きく変わった」	31 +	11 -
「少し変わった」	94	12
「あまり変わらない」	102	12
「全く変わらない」	30	8

注) $\chi^2(3)=8.34, p<0.05$

Table 2-2
「悩んでいる」

	該当	非該当
「大きく変わった」	34 +	8 -
「少し変わった」	99	7
「あまり変わらない」	108	6
「全く変わらない」	36	2

注) $\chi^2(3)=9.10, p<0.05$

Table 2-3
「疲れた」

	該当	非該当
「大きく変わった」	29 +	13 -
「少し変わった」	87	19
「あまり変わらない」	103 -	11 +
「全く変わらない」	33	5

注) $\chi^2(3)=10.93, p<0.05$

Table 2-4
「動揺した」

	該当	非該当
「大きく変わった」	36 -	6 +
「少し変わった」	101	5
「あまり変わらない」	113 +	1 -
「全く変わらない」	37	1

注) $\chi^2(3)=13.62, p<0.01$

Table 2-5
「無気力な」

	該当	非該当
「大きく変わった」	36	6
「少し変わった」	99	7
「あまり変わらない」	106	8
「全く変わらない」	28 -	10 +

注) $\chi^2(3)=14.13, p<0.01$

自由度調整済み残差を算出した結果、
“+”は期待度数より有意に大きいことを、
“-”は期待度数より有意に小さいことを、
それぞれ示す。

Coderを用い、形態素分析を行った。その結果、194種類、計737語が抽出された。10以上の頻度が確認された語は、多い順に「減る」(27)、「話す」(23)、「会う」と「増える」(20)、「機会」と「人」(18)、「オンライン」と「会話」(17)、「コ

Table 3
自由記述における語の出現頻度

抽出語	頻度	抽出語	頻度
減る	27	たくさん	2
話す	23	やり取り	2
会う	20	コロナ	2
増える	20	サークル	2
機会	18	ネット	2
人	18	リモート	2
オンライン	17	以前	2
会話	17	家族	2
コミュニケーション	16	外出	2
直接	10	学部	2
友達	10	関係	2
少ない	9	久しぶり	2
多い	8	苦手	2
対面	8	減少	2
自分	6	交流	2
相手	6	行く	2
電話	6	高校	2
SNS	5	思う	2
マスク	5	時間	2
会える	5	取れる	2
気	5	積極	2
距離	5	相談	2
表情	5	他人	2
話	5	大学	2
感情	4	大声	2
喋る	4	通話	2
読み取る	4	伝わる	2
頻度	4	能力	2
感じる	3	必要	2
緊張	3	聞く	2
使う	3	変わる	2
取る	3	誘う	2
声	3	遊ぶ	2
接する	3	良い	2
大切	3		
仲	3		
分かる	3		
友人	3		

注) 頻度2以上の語のみ掲出

コミュニケーション」(16)、「直接」と「友達」(10)であった(頻度2以上の語をTable 3にまとめた)。これら単語のうち、出現数2以上の72語を用いて、共起ネットワーク分析を行い、共起ネットワーク図を作成した(Fig.)。

その結果、「機会」と「減る」、「オンライン」と「増える」、「直接」と「会う」の関連度が大

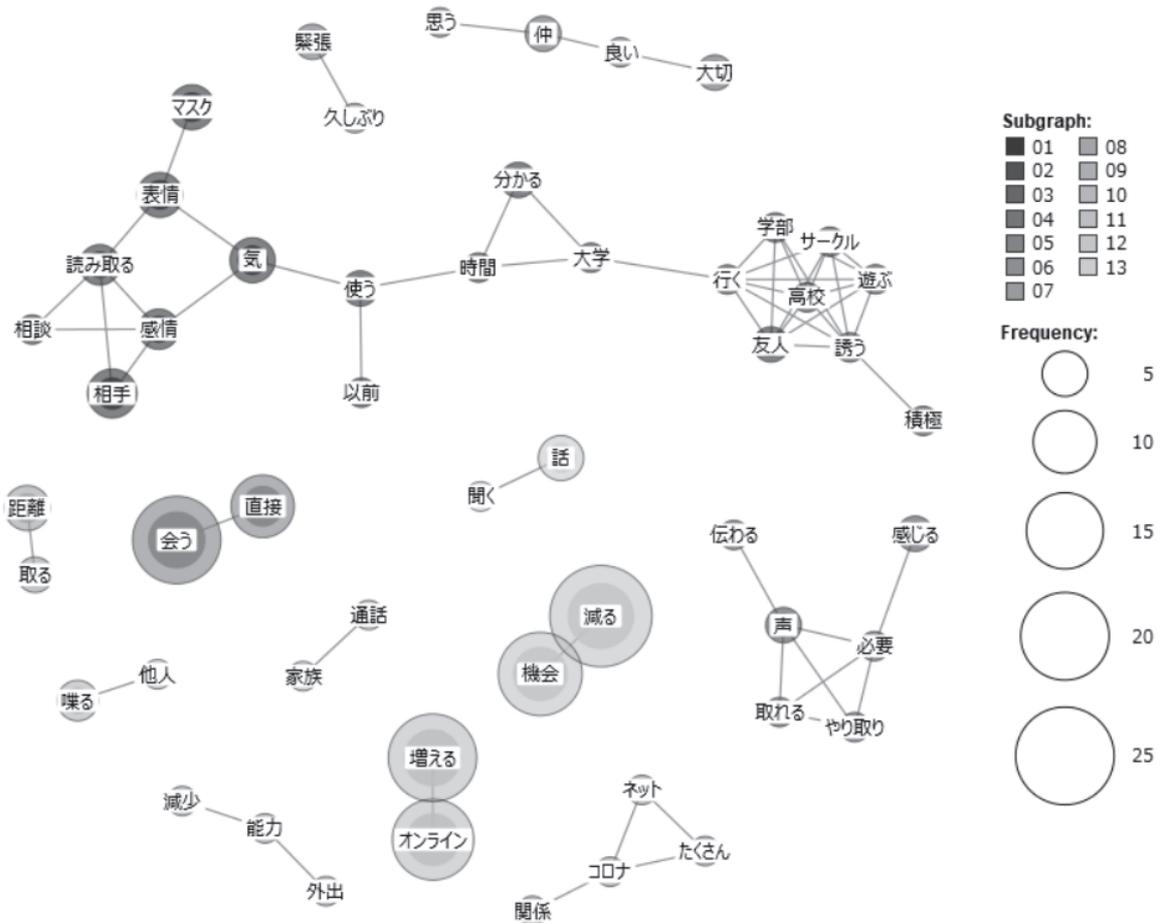


Fig. 共起ネットワーク分析の結果

きかった（以下、“ ”で囲った記述は、回答者の記述をそのまま示す）。“オンラインでのコミュニケーションが増え…”や“オンラインでの交流が増えた”、“直接会うことが減った”、“直接人と会うことがかなり減った”などの記述がみられた。また、「読み取る」を中心として、「表情」や「感情」、「相手」や「マスク」といった語の関連度も大きかった。具体的な記述内容としては、“マスク着用によって表情が読み取りにくくなったし、自身の表情も乏しくなった気がする”、“相談されても、相手の感情などを読み取りづらい”、“マスクで表情が分かりにくいから話し方や目線に気をつけるようになった”などがみられた。「学部」や「サークル」、「友人」や「遊ぶ」、「誘う」などの語も関連がみられるが、これらの中には“学部・サークル・高校時代等の友人からどこかに遊びに行こうと誘われるが、ほとんど断っている”や“学校にいけなから、友達を作ったり、遊んだりすることが

できなかった”などの記述がみられた。その他、「緊張」と「久しぶり」では、“人と会う機会が減って久しぶりに会うと緊張する”、“大切”や「仲」、「良い」では、“本当に仲の良い人との会話を大切にするようになった”や“対面の機会を大切にするようになった”、「話」と「聞く」では“前のめりになって人の話を聞くことが減った”、「外出」、「能力」、「減少」では、“人と会話する能力が減少してる”、“外出する頻度が減り、コミュニケーション能力が下がった”などの記述が得られた。

考 察

本研究の目的は、COVID-19 流行下における青年のコミュニケーションの変化の有無と、それに対する認識を、定量的・定性的の双方の観点から明らかにすることであった。

コミュニケーションの変化

コミュニケーションの変化の有無について

は、「大きく変わった」と「少し変わった」を合わせ、回答者の約半数が変化を実感していることが明らかとなった。藤平他⁵⁾では、回答者となった女子大学生の約4分の3において、友人とのコミュニケーションが「減った」と回答したが、本研究ではこの割合よりも変化があったと回答した対象者の割合が少なかった。藤平他⁵⁾は調査を2020年8月から9月頃に実施しており、この時期はいわゆる「第2波」の時期に該当する。一方、本研究の調査時期である2021年10月は「第5波」が収束する時期と重なり、感染者数の減少傾向がみられた。教示文には「COVID-19 流行前後において…」と記載しているものの、回答時点の感染状況に関連した社会情勢や、それに由来する不安感を含む心理状況が回答に影響を与えている可能性も考えられる。そうであっても約半数の回答者に変化がみられたことから、社会全般において対面コミュニケーションにおいて大きな影響があったことが示唆される。

コミュニケーションの変化に対する感情

こうしたコミュニケーションの変化に対して、どのような感情を抱いているのかについても検討を行った。その結果、「慎重な」、「疲れた」、「不安な」、「自信がない」といったネガティブな形容詞に対する選択率が高かった。上述したように、マスクを着用している他者の感情を解釈する際には、その理解がより慎重になったり、不安で自信のないコミュニケーションを行っており、その結果として疲労感を募らせていると考えられる。特に、 χ^2 検定を用いてコミュニケーションの変化と形容詞の選択の有無の関連を検討した結果、コミュニケーションの変化を大きなものと捉えている個人にあっては、「疲れた」、「悩んでいる」、「退屈な」、「動揺した」、「注意深い」といった形容詞をより多く選択していることが明らかとなった。COVID-19 流行はライフスタイルの大きな変化を要求し、それに対して動揺し、悩みや疲労感を抱いているのかもしれない。

一方で、「のんびりした」や「ゆっくりした」といった、静的な形容詞に対する選択率も上位に見られた。藤平他⁵⁾においても、COVID-19 流行でよかったこととして、16.9%の大学生が、人

間関係のストレスが減ったことなど精神面の安定を挙げている。また、COVID-19 流行下において、大学1年生を対象とした調査では、引きこもり願望が低いほど面接授業を、同願望が高いほどオンライン授業を、それぞれ希望することが示されている¹³⁾。元々対人コミュニケーションに苦手さを感じていた群においては、COVID-19 流行下においてこれを回避できたことで、心穏やかに過ごしている面も見られるようである¹³⁾。このように、元々のパーソナリティや対人関係スタイルがCOVID-19 流行下における対人行動の変化や各種（不）適応を予測するかについては、予め長期縦断計画に基づくデータ収集を行っていない限り、これを検討することは困難であったと考えられる。こうしたデータを用いた検討が待たれよう。

コミュニケーションの具体的な変化

変化の具体的内容について、自由記述で得られた内容を形態素分析によって単語に分解した上で、記述された語の関連性を明らかにすることを目的として、共起ネットワーク分析を行った。自由記述の具体的内容と共起ネットワーク分析の結果を総合すると、「オンラインが増えた」一方、「コミュニケーションや直接会う機会」、「外出する頻度」が減少したことが明らかとなった。特に、「機会」と「減る」、「オンライン」と「増える」は、語の出現頻度も大きかった。やはり外出が減少したことで対面でのコミュニケーション機会が少なくなり、代替としての間接的なコミュニケーション手段を用いてやり取りが行われている様子が示唆された。こうした対面で接触する頻度が減少した結果、数少ない接触機会において、「久しぶりで緊張したり距離を取って接する」など、緊張感や戸惑いを抱いていることがうかがえる。

また、「サークルや友人関係の中で、マスクをした上で」接する必要があるため、「表情や声から相手の感情を読み取る必要」が生じるなど、文化庁⁷⁾の調査結果と同様、マスク着用に伴う対面コミュニケーションの困難さや配慮事項についても意識していることが明らかとなった。対人コミュニケーションにあっては、発言の内容や意味だけでなく、声の高さやアクセント、間の置き方などのパラ言語、視線や表情、ジェ

スチャーなどの身体動作、対人距離や着席位置などのプロクセミックス、衣服や化粧、アクセサリなどの人工物といった様々なチャネルが存在するが¹⁴⁾、マスクを着用した対面コミュニケーションやオンライン上での非対面コミュニケーションでは、こうした要素のうち、少なくとも1つ以上を活用することができない。限られた情報を用いて相手の感情状態を推測するため、齟齬や誤解が生じやすいと考えられる。

オンライン上のコミュニケーションにおけるパラ言語の重要性は、心理臨床の文脈においても指摘されている。対面での面接よりも、オンラインでの面接は非言語的情報が少ない分、互いの伝えたいことがどの程度伝わっているかの把握が難しくなる¹⁵⁾。このため、小さな非言語情報など、コミュニケーションのニュアンスが失われないう、必要に応じて大げさな表現やジェスチャーを用いたり¹⁶⁾、リアクションでOKサインなどのハンドジェスチャーをすることも有効であるとされる¹⁷⁾。このように、非対面コミュニケーションあるいはマスクの着用は、従来のコミュニケーションに比べると非言語的情報の量が不足していると考えられ、これを補うための工夫や配慮が求められるといえる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究の目的は、COVID-19 流行下における若者のコミュニケーションの変化の有無と、その内容について、感情的な側面に着目して検討を行うことであった。約半数の大学生がコミュニケーションの在り方について変化を実感しており、特に大きな変化と認識した個人において、これをネガティブな感情でとらえていることが明らかとなった。また、変化の具体的内容からは、対面コミュニケーションの減少とオンラインの増加、マスク着用に伴う相手の感情の読み取りの難しさ、新たな人間関係の構築に対する困難さと不安を抱いている様子がうかがえた。

本研究の調査時期は2021年の10月であり、COVID-19 流行開始から約1年半経過時点のデータであるが、COVID-19 流行下における対人関係の持ち方の変化やオンラインによるコミュニケーションの変化はある程度持続しており、こうした状況の中でも変化に対してネガティブな感情を抱く個人が一定程度存在することがう

かがえる。さらに、本研究は大学生を対象としているが、若年者においてもコミュニケーションの変化に戸惑いや難しさを感じているという事実は注目に値する。非対面コミュニケーション活用に向けて、情報弱者に限定しない、全世代的な支援が必要であると考えられる。

最後に、本研究の限界や課題を数点指摘する。1つは、学年によって受ける影響が異なっている可能性である。全国大学生協同組合連合会が2021年7月に実施した調査⁹⁾では、大学入学直後からCOVID-19 流行下に直面した2020年度入学生において、「友人とつながれていない孤独感・不安」が、他の学年に比べて最も高く、気分の落ち込みや無気力といった項目も、やはり同学年が最も高かった。直接コミュニケーションを交わす機会を失ったまま学年が進行することが、こうした精神的健康上の課題に関連し、さらにこれらの問題を長期間持ち越していると考えられる。本研究においてはサンプル数の少なさから、学年ごとの特徴の差異に関する検討は見送ったが、各学年の特徴や、コホートの影響について、より長期的な視点に基づく検討が望まれる。

COVID-19 流行下における孤独や孤立の問題について、COVID-19 流行開始後3時点の縦断調査(2020年4月から5月、同年6月から7月、同年9月から10月)の結果、緊急事態宣言発出等の外出規制が続くことで、孤独感が増大すること、年齢上昇に従って孤独感が低減することが明らかとなっている¹⁸⁾。すなわち、日本人においては、孤独感は若年者において高く、また外出規制により高まっていくことが示されている。これまで、社会心理学領域においては、インターネットの利用時間が多いほど、現実生活における家族とのコミュニケーション量が減少し、現実生活における孤独感が高まることが示されている¹⁹⁾。本来人々をつなぐためのインターネットが、むしろ人々の結びつきを希薄化しているこの現象は「インターネット・パラドックス」¹⁹⁾と呼ばれている。近年急拡大しているSNSを含む非対面コミュニケーションの研究はもとより、VRやメタバースなどの仮想空間におけるコミュニケーションの特徴についても、今後の研究課題となろう。

付 記

本研究の実施にあたっては、日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究／課題番号20K14167）の助成を受けた。また本研究の内容の一部は、日本カウンセリング学会第54回大会において発表された。

文 献

- 1) 厚生労働省. 新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について（1例目）. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html.（参照2022年4月18日）.
- 2) 文部科学省. 令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）. https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-00004520_4.pdf.（参照2022年4月18日）.
- 3) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について. https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf.（参照2022年4月18日）.
- 4) 文部科学省. 大学等における令和3年度後期の授業の実施方針等に関する調査及び大学生への支援状況・学生の就学状況等に関する調査の結果について（周知）. https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf.（参照2022年4月20日）.
- 5) 藤平眞紀子、久保博子、星野聡子. コロナ禍による女子大学生の日常生活への影響. 日本家政学会誌 2021; 72: 581-600.
- 6) 日本赤十字社. 新型コロナ禍と若者の将来不安に関する調査. https://www.jrc.or.jp/pres/s/2022/0106_022802.html.（参照2022年4月18日）.
- 7) 文化庁. 令和2年度国語に関する世論調査 https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shupan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/index.htm.（参照2022年4月18日）.
- 8) 第一生命経済研究所. 第3回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（コミュニケーション編）. https://www.dlri.co.jp/report/ld/2020/news2010_02.html.（参照2022年4月18日）.
- 9) 全国大学生生活協同組合連合会. 届けよう！コロナ禍の大学生生活アンケート集計結果報告. https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/covid_enq_2108_02.pdf.（参照2022年4月20日）.
- 10) 寺崎正治、岸本陽一、古賀愛人. 多面的感情状態尺度の作成. 心理学研究 1992; 62: 350-6.
- 11) 清水裕士. フリーの統計分析ソフトHAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究 2016; 1: 59-73.
- 12) 樋口耕一. 社会調査のための軽量テキスト分析—内容分析の継承と発展をめざして—第2版 京都: ナカニシヤ出版、2020.
- 13) 内田知宏、黒沢泰. コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業—心身状態と引きこもり願望— 心理学研究 2021; 92: 374-83.
- 14) 大坊郁夫. しぐさのコミュニケーション: 人は親しみをどう伝えあうか 東京: サイエンス社、1998.
- 15) 西野入篤. 心理療法の面接構造とオンラインカウンセリングについて: 統合的アプローチの立場から. 臨床心理学 2021; 21: 338-42.
- 16) Kroll, J. L., Martinez, R. G., van Dyk, I. S. COVID-19 Tips: Building rapport with adults via telehealth. https://www.researchgate.net/publication/340414789_COVID-19_Tips_Building_Rapport_with_Adults_via_Telehealth.（参照2022年5月7日）.
- 17) 田中恒彦. オンライン心理相談実践のためのガイドライン. 精神療法 2021; 47: 303-9.
- 18) 杉山翔吾、廣康衣里沙まり、野村圭史、他. 外出規制が孤独感・不安・抑うつに及ぼす影響—日本在住者を対象とした縦断研究—. 心理学研究 2021; 92: 397-407.
- 19) Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., et al. Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? The American Psychologist 1998; 53: 1017-31.

ABSTRACT

Changes in communication style of young people in COVID-19 pandemic: A trial to comprehend from free answered question and the emotional words with changes.

Takeshi Fujiwara^{1*}

¹ Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

* Correspondence, tfujiwar@unii.ac.jp

During COVID-19 pandemic, face-to-face communication is limited in many settings. The purpose of this study was to reveal the extent to which young people are experiencing these changes in communication and, if so, how they perceive these changes. A web-based survey of 300 university students was conducted, asking whether or not the communication style had changed, and if so, what the changes were, and how do they feel these changes. About half of the participants answered their communication style had changed before and after the COVID-19 pandemic. Morphological analysis and co-occurrence network analysis were conducted in order to reveal the details of changes. The results indicated that they are experiencing a decrease in face-to-face meeting, an increase in online interactions, a sense of tension and confusion at the first face-to-face meeting in a long time, and difficulty in reading emotions due to wearing of masks. In terms of perceptions of changes in communication, the adjectives that fit themselves were somewhat more negative in nature, and the percentage of participants choosing negative adjectives was particularly large among those who answered “communication had changed a lot”. These results were discussed in relation to various statistical data and previous researches in the field of social psychology.

Key Words: COVID-19, communication, co-occurrence network analysis, students, emotion.